

大宰府アカデミー・令和編 第22講 令和7年1月15日(水)質問及び回答(Q&A)

「江戸時代の大宰府研究」

講師・回答：一瀬 智先生(九州国立博物館主任研究員)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 貝原益軒の『筑前国続風土記』はなぜ「続」なのですか？奈良時代に編纂された『風土記』の続編だからですか？また同書は現在にも珍重される重要な「歴史書」「地誌」と位置づけられるのでしょうか、後の学者からも次々にアップデートされた書籍が出ていることから見ると、「旅行ガイドブック」的な性格もあつたのでしょうか？

A/ 回答

配布資料「史料編」にも【史料3】として載せました『筑前国続風土記』の貝原益軒による自序の中に、

「いにしへ、ならの都の朝に 勅ありて、すへて日の本の風土記をゑりとゝのへさせ、世にめでたくせさせ給ふめれハ、彼書にそなずらへがたしといへとも、其名をしたひて名つけ侍りぬ」

とあり、奈良時代の『風土記』にならって名付けられたことが窺えます。

『筑前続国風土記』その後の地誌作成の参考にされましたし、必要に応じで写本は作られましたが、出版されたわけではないので、一般の多くの人々や旅行者の「旅行ガイドブック」とまでは言えないかもです。ですが貝原益軒は同時期に、『筑前国続風土記』編纂の成果も反映した『筑前名寄』という筑前の歌枕の解説書を執筆しました。こちらは京都の版元から出版されていますので、ガイドブックの役割を果たしたと思われれます。

Q/ 大宰府研究の高まりとともに大宰府史跡保護の必要性が各学者から声高に叫ばれたようですが、各地の文化財保護はすべて所轄の藩だけが責任を負ったのでしょうか？或いは、その史跡の重要性に鑑み、ある程度は幕府からの支援もあつたのでしょうか？

A/ 回答

江戸時代には、宗教政策や領主・領国の安泰祈願のため、幕府や藩が寺社を支援することはありましたが、大宰府跡のような遺跡の保護については、とくに各地の藩や領主が責任を負っていたわけではありません。幕府の指示や支援も特にはありませんでした。

講座で紹介したように、福岡藩では亀井南冥が活躍した一時期に、藩による遺跡の保護がありました。藩が政策として領内の遺跡を保護した事例は全国的に見ても少ないです。大宰府跡以外では、和歌山の和歌の浦、福島の上白河の関、岩手の平泉ぐらいでしょうか。一方で歴史認識が高まると、徳川家康や藩主の先祖ゆかりの地が整備され、顕彰されるというような例もありました。

※ ご質問ありがとうございました。